

割安なWTIは米国の消費者に恩恵をもたらしているか？

計量分析ユニット 需給分析・予測グループ 研究主幹

柳澤 明

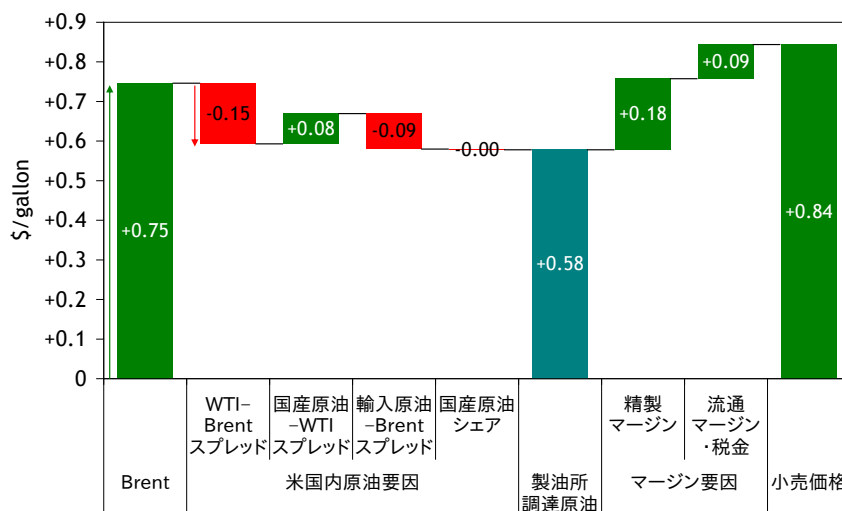
要旨

2011年初以来、国際指標原油間のスプレッド(価格差)が拡大した状態にある。在庫の積み上がりなどを背景としたWTI原油の対Brentディスカウントは、一時は\$25/bbl近くにまで達した。現在では若干縮小しているものの、2013年3月時点で\$17/bbl程度の値差が存在している。米国はヨーロッパやアジアに比べて相対的に割安な原油の恩恵を享受している。シェール革命による天然ガス価格の下落もあり、米国経済にはエネルギーコスト低減という追い風が吹いている。

しかし、WTIのディスカウントは生産量が30万b/dに過ぎない一原油の話である。WTIの指標原油としての役割に疑問符が付いている今、石油製品の消費者である米国の家庭や企業などは、このディスカウントからどの程度の恩恵を得ているのであろうか？

現実には、ガソリン小売価格は割高化しているBrentの上昇幅を越す値上がりとなっている。これは、あたかも割安なWTIによる消費者メリットを相殺するかのようになり、精製・流通マージンが拡大しているためである。同様の傾向は他の石油製品でも観察される。実際、WTI-Brentスプレッドの拡大にもかかわらず、ガソリンの米国-ヨーロッパ間価格差は、短期的な変動を別とすれば変化していない。

米国ガソリン小売価格の変動の要因分解(2010-2012年)



WTIをはじめ米国で原油が割安となっていることによる恩恵は、この2年で\$1,100億規模—1人あたりおよそ\$350—に達していると概算される。しかし、米国の消費者は石油製品価格の下落という直接的なメリットを感じる事ができていない。もっとも、メリット自体が消失しているわけではない。巨額の恩恵はマージン拡大を介して石油業の業績底上げに寄与している。それにより誘発される生産・雇用の拡大や所得の増大を通じて、米国民には間接的に恩恵が及んでゆくと推察される。ただし、その恩恵の波及の仕方は、あまねく、等しくというわけではないのであろう。

キーワード: WTI、Brent、スプレッド、ディスカウント、ガソリン価格